

[学術論文]

カント批判哲学の神の存在証明

Der Beweis des Daseins Gottes in der Kantischen kritischen Philosophie

森 哲 彦

Tetsuhiko Mori

Studies in Humanities and Cultures

No. 8

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 8号
2007年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2007

[学術論文]

カント批判哲学の神の存在証明

Der Beweis des Daseins Gottes in der Kantischen kritischen Philosophie

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「現代の哲学者たちは、神が存在するかどうかという問題を回避する傾向があるように見受けられる。彼らは、神の存在を主張もしなければ、否定もしない。しかし哲学する者は、答弁を求められている者である。神について問われたなら、哲学者は何らかの回答をしなければならぬ」(Jaspers, K. (1949): Einführung, 39-40.)。

要旨に代えて 神の存在証明についてヤスパースは「カント以来、誠実な思索にとっては、神の存在証明が不可能であることは確実である」(Jaspers: Glaube, 32) とする。本論で見るとカント自ら、この神の存在証明の不可能性を論証している。そこでは先行する哲学者たちの神の存在証明、つまり自然〔物理〕神学的証明、宇宙論的証明、および存在論的証明(デカルト的証明)は成立しえず、これらの神学、すなわち自然〔物理〕神学、宇宙論的神学、そして存在論的神学は、超越論的神学のゆえに批判される。しかしこのカントの主張は、理性の思弁的原理や認識論的立場からでなく、存在論的立場からの批判である。それゆえカントによれば「道德諸法則が根底に置かれ」る「理性の神学」(A636, B664)は存在する。これがカントの道德神学である。

戦後ヤスパースは、先行する哲学者たちの「あらゆる神の存在証明を、カントが見事に論駁したあとを受けて、またヘーゲルが思想的には豊かだが安易で誤った仕方でも再び神の存在証明を復活させたあとを受けて...今日では、神の存在証明を新たに哲学的に我がものにすることが、是非とも必要なことである」(Glaube, 33)としている。しかも自らその必要性を急務としている。なぜなら神の存在証明を獲得しなければ「哲学者は、一般に何事も主張せず、何事も否定しえないところの懐疑的哲学の立場を取る。かまたは哲学者は、自分の立場を対象的に規定された知、すなわち科学的認識に限定して、我々は知りえない事柄については、沈黙を守るべき、という命題をもって哲学することをやめる」(Einführung, 40)と自戒する。本論で取り上げるカントの神問題については、問題史的、概念史的解釈を行う。しかし問題の概念史的解釈を行うには、それに先行して発展史的解釈が必要である。そのため本論ではカント前批判期と批判期(『純粹理性批判』)の発展史的解釈による小論(後掲引用・参考文献)を前提としているものである。

キーワード: 神の存在証明 (Beweis des Daseins Gottes)、超越論的神学 (transzendente Theologie)、自然〔物理〕神学的証明 (physikotheologischer Beweis)、宇宙論的証明 (kosmologischer Beweis)、存在論的証明 (ontologischer Beweis)、道德神学 (Moraltheologie)

I 序

カント (I.Kant) 宗教哲学の統一的叙述は『実践理性批判』のプランと思想によって¹⁾まとめられ、またカント宗教哲学の特徴は『実践理性批判』の立論そのものに含まれているとすることが、通説とされている。それは『実践理性批判』²⁾の「純粹実践理性の要請としての神の存在 (Dasein Gottes als ein Postulat)」において「神とは悟性 (Verstand) と意志とによって自然の原因 (従って創始者 Urheber) である存在者である」(V125)。そして「道德法則 (moralisches Gesetz) は、純粹実践理性の客体および究極的目的としての最高善 (höchstes Gut) の概念を通して宗教に至る」(V129) とするものである。ここからカントの宗教哲学は『実践理性批判』の一部「一種の付録」となるという説である。これに対し、シュヴァイツァー (A.Schweitzer) は『カントの宗教哲学』については『純粹理性批判』から『単なる理性の限界内における宗教』に至るまで論述することを旨とする。またカントの宗教哲学は、ピヒト (G.Picht) によれば「『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』という三大批判のひとまとまりのものとして解釈されるべきであろう」³⁾ とする。

しかし周知のようにこれら三大批判に先立ち、カントは、哲学前批判期において神の存在証明を問う宗教哲学を論述している。にもかかわらず、上記の宗教哲学者たちは『純粹理性批判』の論述において、前批判期での神問題に論及していない。だがシュヴァイツァーが言うように、カントの宗教哲学が「一つの思想連関の進行から生じてきている」⁴⁾ とするなら、しかも「『純粹理性批判』が宗教哲学に触れる部分が欠けている」⁵⁾ とするなら、なおさら前批判期における神の存在証明を解明しておく必要があるのではないか。ではカント哲学前批判期での神の存在証明とその取り扱いは、いかなるものか。本論では、前批判期での神の自然〔物理〕神学的証明、宇宙論的証明、存在論的証明についてと、批判期『純粹理性批判』⁶⁾の神問題の思想連関の進行についてを問題史的、概念史的解釈として解明する。そこで本論では、批判期における神問題を暗示している1750-60年代の前批判期の著作に溯って、神問題を解明する。そして本論では、神の存在証明の問題を、前批判期と批判期『純粹理性批判』の脈絡に限定して考察するものである。

II 前批判期

1 自然科学観からの神の存在証明

1 カントは、前批判期では先行する学問の多様な影響を受けて、最初は主として広義の自然科学研究に志向する。カントが最初に取り組んだ自然科学期の大部な代表的著作のうち、神の存在証明を論じたものに『天界の一般自然史と理論』(『天界自然史論』1755年⁷⁾)が挙げられる。

この『天界自然史論』は「宇宙生成（進化）論」としてまとめられた体系研究である。ここでのカントの自然観は、ライプニッツ（G.W.Leibniz）のいう目的論的自然観によっており、自然の必然的展開という説である。すなわちカントは『天界自然史論』序文において、物質は「自然的展開を通してより完全な構造へむけて自己を形成しようと努力する」（I263）とし、自然は「その要素の本質が神の悟性（知性）の永遠の理念から生じたからには、それらの起源以来もっている完全性（Vollkommenheit）の標徴がうかがわれる」（I263）とする。この主張がカントの自然観を裏付ける目的論である。カントは、この自然観を展開するに当り、まず信仰の擁護者の言い分を取り上げる。

2 信仰の擁護者は、カントがいう「人間の理性の力をはるかに越えるかにみえる」（I221）宇宙生成の体系を認める自然観に対し、次のように反論する。すなわち信仰の擁護者は「もし自然力の盲目的機械的作用が、カオスから、それほどまで見事に展開しうるとすれば、そしてそのような完全性におのずと到達するとすれば、宇宙の美を注視することから引き出される神的創造者の証明は、まったく無力となり、自然はそれ自身で充足しており、神による支配は不要となる」（I222）とする。これに対しカントは「神の真理が無謬であると、きわめて深く確信しているので、神の真理に矛盾するものは、すべてこの真理によって十分反駁されたものとみなす」（I222）とする。そして「私の体系と宗教は、まさに一致する」（I222）ので、カントの「確信は恐れを知らぬ不動心に高まる」（I222）とする。カントによれば「宇宙の美を完全性から全知の創造者を確認する証明の価値を、私は全面的に承認する」（I222）という根拠に対して、信仰の擁護者が「自然における調和が物質の自然的傾向によって説明されるようでは、自然が神の摂理に依存しないことを証明するようなものだ」と懸念する」（I223）のである。これに対しカントは、物質と自然法則の関係から、神の存在証明を行う。すなわち「物の根源的素材である物質は、かくて或る法則に結合しており、これらの法則に自由にゆだねられるとき物質は必然的に美しい結合を生じざるえないのである。物質はこの完全性の計画から免れる自由を持たない」（I228）。ゆえに「自然はカオスのうちにあっても規制的に、かつ秩序正しく行動するほかはないのであるから、まさにこの理由によって神は存在する」（I228）と主張する。ここにカントは神の存在証明（Beweis des Daseins Gottes）を、自然科学に基づく宇宙論的証明によって示すのである。

3 カントは『天界自然史論』第八章において「われわれは宇宙構造を眺めるとき、その組織における最も卓越した秩序づけとその諸関係の完全性に示されている神の手の確かなることを知らざるをえない」（I331）とする。これに対し、たいていの哲学者たちは、かねて一般的な偏見を抱いているものだから、なにか秩序立てたものを一般的法則によって生み出す自然力を嫌悪

する、とする。そして哲学者たちは「もし自然力のなかに根源的形成がひそんでいるとするなら、宇宙の支配をめぐる自然と神が争うことになるし、この根源的形成は、神に依存しない原理であり、永遠の盲目的運命になってしまう」(I332)とするのである。この哲学者たちの反論に対し、カントによれば「自然は、そして物質の相互作用の永遠の法則は、神なしでも必然的であるかのような自立した原理ではない」(I332)のである。なぜなら「自然が一般的法則によって生み出したものには、これほどまでの調和と秩序がみられるのだから、万物の本質は、なんらかの根源的存在者のうちに共通の起源をもっているにちがいない」(I332)からである。とはいえ哲学者たちがいうように、もし「万物の本質がその永遠の法則によって無秩序と不合理しか生まれずとすれば、万物は神に依存しないということが証明されることになるろう」(I333)。この無神論に対しカントによれば、もし「自然が完全に展開すればするほど自然の一般的法則が秩序と調和へつながればつながるほど、それだけ確実に自然は神を証明することになる」(I334)とするのである。そしてカントは「もし宇宙構造に秩序と美とがあらわれるなら神は存在する」(I346)と結論づける。このことから既述のように「私の体系と宗教は、まさに一致する」(I222)とすることによって、神の存在証明を行うのである。ここには明らかに自然〔物理〕神学的証明や宇宙論的証明が論述されているといつてよいであろう。

2 絶対必然的な神の存在証明

1 カントは著作『形而上学的認識の第一原理の新解明』(『新解明論文』)1755年⁸⁾の第二章で決定根拠律を取り上げる。この決定根拠律について、カントは第四命題で「決定することは、述語〔Aである〕が、その反対〔Aでない〕を斥けて定立することである。主語と述語の関係で主語を決定するものが根拠といわれる」(I391)。その「根拠は先行的決定根拠と後続的決定根拠とに分けられる」(I391)。この「先行的決定根拠とはその概念が決定されたものに先行する根拠である」(I391)。この「先行的決定根拠」は「存在根拠」と呼ばれ、一方の「後続的決定根拠」は「認識根拠」とよばれる。ここからカントは真理について次のように命題を立てる。すなわち第五命題で「決定根拠なしにはいかなるものも真理ではない」(I393)とする。つまり「真理とは、反対の述語を排除することによって、命題の真理を決定する何かが存在しなければならない。この何かが決定期根拠のことである」(I393)。確かに「真理の認識がつねに根拠の考察に基づくことは確かなことである」(I394)としても、第六命題でカントは「或るものがその現存在の根拠を自らのうちに持つことは不合理である」(I394)とする。つまり「或るものがその現存在の根拠を自らのうちに持つこと」は「その現存在の原因」(I394)ということになる。しかし原因は結果に先行し、結果は原因に後続するのだから、その同じものが先行し、同時に後続することになり、不合理である、ということになる。それゆえ「絶対必然的に存在するといわれるものは」、

「いかなる先行的決定根拠をもたない」。つまり「そのものは存在する」(I394) というのである。

2 以上の論証を前提として、カントは当時、最近の哲学者〔ヴォルフ (C.Volff)〕の主張を批判する。その哲学者の意見とは「神はその現存在の根拠を自らのうちに持つ」(I394) というものである。しかしカントは、この意見に同意しない。哲学者の主張によれば「神の外部にいかなる根拠も見出すことができないのであるから、神は根拠を自らのうちに持つはずだ」(I394) というのである。このことは「諸根拠の連鎖をたどって原理にまで至れば」(I394) 原因と結果の関係となり、不合理となる。しかしこのことにより人々が「神の概念自体を採用し、神の概念が、神の存在を決定する、と主張する」(I394) ことになっている。そしてもし「神の概念が真であれば、神が存在することも真となる」(I395) というのが、デカルト (R.Descartes) の論証に賛成するための意見なのである。しかしカントによれば、こうした意見は「観念的にはありうるかも知れないが、実在的にはおこりえないことは明白である」(I394) とする。この神の存在論的証明の不可能性からカントは、新たに神の存在証明を行うものとなる。

3 そこでカントは神の存在証明を第七命題で「それ自身の可能性、万物の可能性に先行して存在するもの、すなわち絶対必然的に存在するものがある。それは神と呼ばれる」(I395) とする。ここでいう可能性とは「統合された諸概念が矛盾しないこと」(I395) である。つまりいかなる可能性概念も実在的なものとして存在するので、その実在的なものは、絶対必然的に存在する (I395)、というものである。このようにして「万物の可能性 (Möglichkeit) の絶対必然的な原理としての唯一の神が存在する」(I395)。従ってこの「神の存在証明」は「発生論的証明」ではなく「万物の可能性というもつとも根本的な証拠に基づく証明」(I395)、すなわちこれがカントの論証する形而上学的な神の存在証明である。

3 絶対的な現実的必然性としての神

1 カントは、著作『神の存在論証の唯一可能な証明根拠』(『神の存在証明』) 1763年⁹⁾で、神は如何にして存在するかを証明するために、あらゆる種類の「神の存在証明」を分析的手法 (II66) で解明しようとする。とはいえその解明は限定的である。つまりカントによれば「神が存在するという認識は、われわれのあらゆる認識のうちで最も重要なもの」(II65) である。しかし「この目的に達するためには、形而上学の底無しの深淵にまで近づかなければならない」(II65)。しかも「こういった証明は、いまだ発見されていない」ので、提示しうるのは「差し当たり証明根拠すぎない」(II66) と限定する。ではカントが提示する「唯一可能な証明根拠」とは何か。

2 カントは第一部、第一考察「存在一般について」(II70)で、可能なものからの存在証明を分析する。その際、カントの基本命題は「存在はなんらかのものの述語または規定ではない」(II72)というものである。つまり述語は「可能なものとしてしか存在できない」ので「絶対的に必然的なものの存在を証明しようとする場合」、「存在はそういった述語の中には決して見出されない」(II72)のである。従ってカントによれば、可能なものから出発する存在の証明は有りえないものとなる。この第一考察の証明根拠の分析について、カントは「根拠としての単なる可能なるものの概念から帰結した存在が推論される」(II156)にすぎない「有名な証明」を持っているとする。そしてこのような「デカルト的証明 (Cartesianischer Beweis)」(II156)は、既述のように不可能となる。

次に第二考察でカントは「存在を前提としている限りでの内的可能性 (innere Möglichkeit)」(II78)を分析する。その際、基本命題は「いかなるものの内的可能性もなんらかの存在を前提とする」(II78)というものである。その場合、カントによれば可能性には形式的側面と実質的側面が含まれている (II78)。ここから「なんらかの可能性が存在して、しかもなんらかの現実的なものも存在しないことは自己矛盾」(II78)となる。従って「すべての可能性は...現実的なものの帰結という形で与えられる」(II79)ものとなる。そこでカントは、内的可能性の唯一の根拠となる現実的なものを、この絶対的可能性の第一実在 (real) 根拠」(II79)と名付ける。この絶対的可能性の「第一実在根拠」こそが、カントがいうように「絶対的に必然的なものが存在する」、「それは神に他ならない」(II89)のである。これが第四考察でいう「神の存在の論証のための証明根拠」(II87)となる。以上においてカントは絶対的な現実的必然性としての神の存在証明根拠そのものの考察を「ア・プリオリな道によって出発した」(II92)とする。ここに至ってカントは『天界自然史論』で検討した「自然科学を通して神の認識へと上昇しようとする方法」(II68)、つまり自然〔物理〕神学的や宇宙論的証明の不可能性を見ることに転換するものとなる。

3 第三部でカントが、既述の「神の存在のあらゆる可能な証明根拠」(II156)を二種類に分け、分析、批判する。それは第一種「神の存在証明の根拠は、純粹に可能なままの或るものという悟性概念から導かれるのか」(II156)、第二種「神はそれとも実在するものという経験概念から導かれるのか」(II156)のいずれかである。第一種は「帰結としての可能なるものから根拠としての神の実在が推論される」(II156)というものである。カントによれば「可能なものの定義から、そのものの存在を推論することはできないし、なおさら神の存在証明はできない」(II156-157)とする。ここでもカントは「いわゆるデカルト的証明」(II156, 162)に対する批判を行っているのである。第二種は「経験的なものから絶対的第一原因を推論し、さらに第一

原因の概念の分析を経て間接的に神の属性を推論するのか、あるいは経験的なものから、ただちに神の存在および諸属性を推論する」(II156)という「ヴォルフ学派の哲学者」(II157)の証明についてである。すなわちこの「経験概念の論理的分析を通して、神の属性に至るという証明」(II157)の仕方は、結局「概念から行われている点で、デカルト的証明と同様」(II158)であるので「やはり全く不可能」(II157)であると批判される。

Ⅲ 批判期

1 純粋理性の理想としての神

1 カントが『純粋理性批判』において神の存在証明を行う箇所は、第三部「超越論的弁証論」の第二編、第三章「純粋理性の理想」である。ここでいう純粋理性の理想とは何か。カントは第一節「理想一般」を理念に関連づけて明らかにする。カントによれば「理想 (Ideal) と名づけるものは理念 (Idee) よりもはるかに客観的実在性 (Realität) から遠ざかっている」(A568, B597) ように見えるものである。ところで「人間理性は、理念のみならず理想をも含んでおり」(A569, B591)、その理想は「或る種の行為の完全性の可能性の根底に存している」(A569, B597) ものである。換言すれば「理念が規則を与えるように」、「理想は模像の全面的な規定の原型として役立つ」(A596, B597) ものである。人間理性は確かに対象を考えるが「その対象の概念は超越的 (transzendent) でしかない」(A571, B599) のである。

2 次にカントは第二節「超越論的 (transzendental) 理想」について次のように論述する。つまり「対立しあうあらゆる可能な述語のうち、一つだけが、つまり存在に端的に属するものだけが〔実在的〕存在者の規定において見出される」(A576, B604)。それゆえ「この存在者は或る超越論的理想であり....人間理性の可能な唯一の本来的理想でもある」(A576, B604) とする。さらに「理性の理想の対象が、根源的存在者 (Urwesen, ens originarium) と呼ばれる」(A578, B606) ことについては「現実の対象と他の物との客観的関係を意味するのではなく、理念と諸概念との関係を意味するものであって、かくも卓越した存在者の現存在 (Existenz) に関しては、われわれは完全に知るところではない」(A579, B607) とする。しかし仮に根源的存在者を唯一の存在者、永遠の存在者と規定するなら「そのような存在者の概念は、超越論的意味において神の概念であり、かくて純粋理性の理想は、超越論的神学 (transzendente Theologie) の対象」(A580, B608) となる。つまりカントは、超越論的理想を仮象 (Schein) として導入しようとするのである。

3 思弁的理性による物の認識は不可能であることを、カントは第三節「最高存在者の現存在を推論する思弁的理性 (spekulative Vernunft) の証明根拠」(A583, B611) で次のように論述する。思弁的「理性は諸概念から始めるのではなく、普通の経験から始める」ので、いまや「理性は、無制約的必然として実存在のそのような長所に適合する存在者の概念を探し回る」(A585, B613) のである。しかし「理性は一つの方途 (経験的な方途) によっても、他の方途 (超越論的方途) によっても、ほとんど何ものをも達成することがなく、理性的思弁の単なる力によって、感性界を越え出て行くために、いたずらにその翼を広げるにすぎない」(A591, B619) とする。そしてこのような「思弁的理性に基づいた神の存在の証明様式は、三つしかない」(A590, B618) とする。つまり第一の証明は「一定の経験」から出発する「自然 [物理] 神学的証明 (physikotheologischer Beweis)」、第二は「不特定の経験」を根拠とする「宇宙論的証明 (kosmologischer Beweis)」、第三は「すべての経験を捨象」し、最高存在者の単なる概念に基づく「存在論的証明 (ontologischer Beweis)」(A591, B619) である。思弁的理性に基づくこれら三つの証明は、不可能として批判される。最後に道徳神学 (Moraltheologie) が末尾で取り上げられる。ただしカントは、このような神の存在証明の不可能性を前批判期でも試みているが、道徳神学については、新しく見出される場所である。

4 カントは第四節「存在論的証明」の批判において、何よりも重要なことは、存在が現実でないという認識によって担われているということである。つまり存在が現実とみなすことの誤りが明らかになることにより、存在論的証明は論駁されるのである。カントによれば「絶対的に必然的な存在者の概念は、純粋理性概念、すなわち単なる理念であり、その理念の客観的実在性は、理性がそれを必要とするということによつては、まだ証明されない」(A592, B620) のである。カントは、百ターレルの例をもって本来、存在は現実でなく、対象と概念とはまったく同じものを含まず「現実的なもの (das Wirkliche) は単に可能的なもの以上のものを含まない」(A599, B627) ことを明らかにする。カントによれば「現実の百ターレルは、可能的な百ターレル以上のものを含んでいない」(A599, B627)。なぜなら「可能的な百ターレルが現実の百ターレル以上を含んでいる場合には、私の概念は全対象を表現せず、それゆえまた対象に適合した概念でもないからである」(A599, B627) とする。従つて「最高存在者 (höchstes Wesen) の概念は、多くの観点において、はなはだ有効な理念である....しかし理念は何かそれ以上のものの可能性に際して、われわれに役立つほどのことを決してなしえない」(A601-602, B629-630) のである。従つて「概念からの最高存在者の存在についての、あのきわめて有名な存在論的 (デカルト的) 証明における努力と労力が無駄となり、或る人が単なる概念に基づいて洞察を豊かにしようとしてもできないのは、或る商人が自らの状態を改善するために、その現金在高 (Kassenbestand) に、いくらかのゼロを付け加えたところで、その財産をより豊かにするわけではないのに等しい」

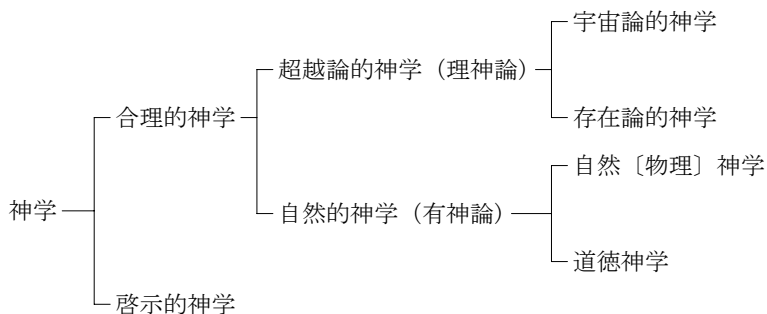
(A602, B630) ののである。要するに可能的な百ターレルまたは百ターレルの概念と現実の百ターレルとは、異なるという例証により、カントは、いわゆる神の概念と現実とは相違するとしているのである。

5 カントは第五節「宇宙論的証明」(A603, B631) で「ライブニッツが世界の偶然性からの証明と名づけた宇宙論的証明」(A604, B632) について次のように検証する。すなわちライブニッツのいう証明によれば、推理は [大前提] 「何かが実存在する (existeiern) ならば、端的に必然的な存在者も実存在していなければならない」、[小前提] 「少なくとも私自身は実存在する」、[結論] 「ゆえに絶対的に必然的な存在者は実存在する」(A604, B632) というものである。これに対しカントによれば、この宇宙論的「証明は経験から始まっている」(A605, B633) ものである。しかも「あらゆる可能的経験の対象は、世界と呼ばれているので、そのためこの証明は、宇宙論的証明と名づけられる」(A605, B633) のである。確かに「宇宙論的証明は、経験一般を根拠にしているとしても、経験の何らかの特殊な性質に基づくものではなく、経験的意味一般によって与えられた実存在と関連する純粹理性原理に基づいて行われている」(A614, B642) ものである。だがそこでの経験は何も教えない。従って「思弁的理性は、ここであらゆるその弁証論的技術をあげて使用し、最大限の超越論的仮象をつくりあげているように見える」(A606, B634) のである。それゆえ「宇宙論的証明においてあらゆる証明力を含んでいるものは、もともと単なる概念からの存在論的証明」(A607, B635) に過ぎなくなる。つまり宇宙論的証明も存在論的証明の出発点に帰してしまうことになり、従って「これまで行われた二つの証明は超越論的であった」(A614, B642) のである。

6 以上二つの証明が不可能の場合、残された証明は第六節「自然〔物理〕神学的証明」(A620, B648) である。その証明とは「一定の経験が....或る最高の存在者の存在を確信するのに、私たちに確実に役立つ証明根拠を、与えはしないかどうかを試みる」(A620, B648) というものである。さて「存在の世界は、多様性、秩序、合目的性、美の計り知れない舞台をわれわれに開示する」(A622, B650)。しかしこの無限の偶然的なもの外側に「自己自身で根源的に独立的に存立しつつ、同じ偶然的なものを保持し、その根拠の原因としてこの偶然的なものに対して、同時にその持続を確保する何かが想定されなければ」(A622, B650) ならない。この証明は自然研究を活気づけ、新たな活力を獲得する。しかしこの証明が立証しうるのは「世界建設者 (Weltbaumeister) であって世界創始者 (Weltschöpfer)」(A627, B655) ではないのである。従って「自然〔物理〕神学的証明は、それだけでは最高の現存在を決して立証しえず」(A625, B653) そのため、ひとは「経験的証明根拠によって導かれるこの論証を一挙に見捨てて」、「世界の偶然性へと移行する」(A629, B657)。それゆえ「自然〔物理〕神学的証明は、その企てにおい

で行き詰まり、こうした困惑によって突然に宇宙論的証明へ飛び移ったのであるが、宇宙論的証明は、隠された存在論的証明にすぎない（A629, B657）。従って思弁的理性によって開かれている三種類の神の存在証明は、結局のところ成立しないということになるのである。

7 カントは以上の論述を前提として第七節「理性の思弁的原理に基づくすべての神学の批判」（A631, B659）を行う。ではそもそも神学とは何か。神学とは根源的存在者についてのわれわれの認識体系である。その神学の体系区分がここでの問題である。そこで神学を根源的存在者の問題と解する場合、神学は、理性に基づく認識（合理的神学）か、啓示に基づく認識（啓示的神学）かである（A631, B659）。合理的神学は、対象を単に純粹理性によって考える「超越論的神学」か、対象を自然から借用する概念によって考える「自然的神学（natürliche Theologie）」かに分かれる。前者の神学のみを是認するひとは理神論者（Deist）、後者の神学を想定するひとは有神論者（Theist）と呼ばれる。理神論者は、根源的存在者について「世界原因」を考えるが、有神論者は、それについて「世界創造者」を考える（A632, B660）。そして理神論者は、根源的存在者としての「神」を信じるが、有神論者は「生ける神（lebendiger Gott）」を信じるといえよう。さらに超越論的神学は、根源的存在者の存在を経験一般から導出しようとする「宇宙論的神学」と経験なしに根源的存在者の存在を認識しようとする「存在論的神学」とに分かれる。さらに「自然的神学は、この世界においては、自然と自由という二種類の原因性とその規模が想定されねばならない」（A632, B660）。それゆえ自然的神学は「すべての自然的秩序と完全性の原理」としては「自然〔物理〕神学」と呼ばれ「すべての人倫的な秩序と完全性の原理」としては「道德神学」と呼ばれる（A632, B660）。以上による神学の体系区分は、次のようである。



2 道德神学

1 カントは道德神学を論述するに当り、理論的認識と実践的認識の相違から始める。まず理論的認識は「現にあるところのものを認識」し、実践的認識は「現にあるべきところのものを

表象」(A633, B661)する。その実践的認識は、端的に必然的である実践的法則(道徳法則)である。その「条件は要請される」ものである。これに対し理論的認識の条件は、偶然的であり「仮定される」だけである(A633, B661)。そして「理論的認識は、ひとがいかなる経験においてそこに到達できない対象ないし対象のそのような概念に関する場合には思弁的である。理論的認識は自然認識に対立するが、自然認識は可能的経験において与えられうる対象...以外のいかなるものともかかわらない」(A634-635, B662-663)に過ぎないだけである。そこでカントは次のように神学について主張する。つまり「理性の単なる思弁的使用のすべての試みは不毛で...空虚で虚無であり」、「理性の自然的使用の原理はいかなる神学へも導かない」のである。従って「道徳諸法則が根底に置かれなければならないなら、...どこにも理性の神学はありえない」(A636, B664)ものとなる。それゆえ「根源的存在者は理性の単なる思弁的使用によっては単なる理想」(A641, B669)にとどまる。もしこの「欠陥を補う道徳神学が存在するべきだとすれば、その場合、初めはただ蓋然的にすぎなかった超越論的神学は、神学という概念を規定する」ことによって、おのおのの不可欠性〔超越論的神学がなくてはならないこと〕を主張する(A641, B669)にとどまるだけである。従って理性の思弁的原理に基づくすべての神学は「単に超越的神学からのみ引き出されうる」(A642, B670)ものである

2 道徳神学についてカントは「超越論的方法論」の第二章、第三節「純粹理性の最終目的の規定根拠としての最高善の理想」において論述する。カントは道徳神学の考察にあたり、理性問題を欠落させるわけにはいかないとし「理性のすべての関心(思弁的関心、および実践的関心)は、次の三つの問いに集約される」(A804, B832)とする。すなわち「1わたしは何を知りうるか、2わたしは何を為すべきか、3わたしは何を希望することが許されているか」(A805, B833)である。第一の問いは、単に思弁的である。第二の問いは、単に実践的であり、道徳的であるので〔理論理性〕批判の問題とならない。第三の問いは、実践的であり、理論的である。そしてその第三の問いの希望について「実践的なものと人倫的法則に関するあり方は、まさに知識と自然法則が諸物の理論的認識に関するあり方と同じもの」(A805, B833)なのである。従って純粹理性は、ある種の「実践的使用、すなわち道徳的使用においては経験の可能性の諸原理」(A807, B835)を含むのである。それゆえ「純粹理性の諸原理は、その実践的使用、道徳的使用においては、客観的実在性をもつ」(A808, B836)のである。カントはこうして道徳神学の考察へと進む。ここから道徳神学とは、思弁的神学に対して独自の優位を有するのであり、思弁的神学は決して客観的諸根拠に基づいて根源的存在者を指示しえない。従って超越論的神学や自然〔物理〕神学において、唯一の存在者を想定することはできない(A814, B842)のである。また自然〔物理〕神学は、すべての自然研究が諸目的と体系の形成に向けられて、結局のところ超越論的神学へと導く(A816, B844)ものとなる。そこで道徳神学にとり重要なこと、つまり道徳神

学は、超越的に使用されてはならず「内在的 (immanent) に使用される。すなわちわれわれが全目的の体系に適合することによって、この世界におけるわれわれの使命を果すために使用される」(A819, B847) べきということである。この道德神学の問題は『実践理性批判』の「純粹実践理性の要請としての神の存在」として展開される。

IV 結

カントは『純粹理性批判』において神の存在論的証明、宇宙論的証明、自然〔物理〕神学的証明の不可能性を論証し、末尾で道德神学に言及している。しかもこの三つの証明の不可能性は、前批判期で論述されている。しかしながらこの前批判期と批判期の神問題の関連について、カントは『純粹理性批判』においては、前批判期のそれら「神の存在証明」について論述したことに言及していない。なぜか、常に先行する諸哲学の批判を行い、後年、歴史哲学を問題とするカントは、自らの先行論述は前提としないようである。その理由としては、1763年著作『神の存在証明』出版2年後の1765年に、カントは、ランベルト (J.H.Lambert) 宛の手紙で「私は多年の自己の哲学の考察を考えられるかぎり、多方面にむけてきた。そしてこれまでに様々な転倒を経験した」¹⁰⁾ と。しかし前批判期に神の存在証明について論述しながら『純粹理性批判』では、どの程度「転倒」したのか、カントはとりたてて説明しない。またカントは1781年のヘルツ (M.Hertz) 宛の手紙では『純粹理性批判』に「含まれているのは〔1770年〕『可感界と可想界』...から始まる、あらゆる多様な研究成果を含んでいる」¹¹⁾ としている。このことからいえば、カントの論述には、1770年以前の前批判期と批判期『純粹理性批判』の神問題についての一つの思想連関の進行が欠落しているものとなろう。しかしながらこのことは、カントが一方では神問題についての前批判期から『純粹理性批判』への思想連関についての苦渋の無視を行い、他方で逆にその思想連関の進行を肯定する論法と解しうるのではないか。もしそのように解しうるとすれば、神の存在証明の考察の転倒や無視にもかかわらず、前批判期と『純粹理性批判』において共通したカントの宗教哲学原理は、思弁的理性に基づく神の存在証明が不可能であるという論述の一貫性は明白であるといつてよいであろう。

(未完)

注)

- 1) Schweitzer, Albert: *Die Religionsphilosophie Kants von der Kritik der reinen Vernunft bis zur Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft*, Freiburg 1899. Georg Olms Verlag Hildesheim/New York 1974.S.2. (abgek. Religionphilosophie). シュヴァイツァー・斎藤義一・上田閑照訳『カントの宗教哲学—『純粹理性批判』から『単なる理性の限界内の宗教』にいたるまで—』著作集15, 16巻、白水社、1959年。
- 2) Kant, Immanuel: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich

- Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. V, 1908. 引用箇所を表示は、アカデミー版カント全集の原著本文に基づき巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に（ ）で示し、典拠を記するものとする。カント・深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、1965年。カント・坂部恵・伊古田理訳「実践理性批判」『カント全集』7所収、岩波書店、2000年。
- 3) Picht, Georg: *Kants Religionsphilosophie*, Hrsg. von Constanze Eisenbart in Zusammenarbeit mit Enno Rudolph, Stuttgart: Klett-Cotta, 1985. S.1.
 - 4) Schweitzer, A.: *Religionsphilosophie*, S.3.
 - 5) Ebd., S.2.
 - 6) Kant, I.: *Kritik der reinen Vernunft*, 1. Aufl. 1781. 2. Aufl. 1787. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd.III, Berlin 1911. 引用箇所を表示は、慣例にならぬ、第一版をA、第二版をBとし、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に（ ）で示し、典拠を記するものとする。カント・原佑訳「純粋理性批判」『カント全集』第四五六巻所収、上中下、理想社、1966、1973年。カント・有福孝岳訳『カント全集』456所収、上中下、岩波書店、2001、2003、2006年。
 - 7) Kant, I.: *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*, 1755. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd.III, Berlin 1910. S.215-368. カント・高峯一愚訳「天界の一般自然史と理論（1755年）」第十巻所収、理想社、1966年。カント・宮武昭訳「天界の一般自然史と理論」『カント全集』2所収、前批判期論集II、岩波書店、2000年。
 - 8) Kant, I.: *Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio*, 1755. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. I, Berlin 1910. S.385-416. 参考欧文訳として、ヴァイシェーデル (W.Weischedel) の独語対訳 (1960年)、ロイシャー (J.A.Reuscher) の英訳 (1958年)、ウォルフフォード (D.Wolford) の英訳 (1992年) が挙げられる。カント・山下正男訳「形而上学的認識の第一原理」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・山本道雄訳「形而上学的認識の第一原理」『カント全集』2所収、前批判期論集II、岩波書店、2000年。
 - 9) Kant, I.: *Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes*, 1763. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, S.63-163. カント・山下正男訳「神の現存在の論証（1763年）」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・福谷茂訳「神の存在の唯一可能な証明根拠」『カント全集』3所収、前批判期論集III、岩波書店、2001年。
 - 10) Zu Johann Heinrich Lambert, 31. Dez. 1765. *Kant's Briefwechsel*. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd.X, Berlin und Leipzig 1922. S.55. カント・北尾宏之・竹山重光・望月俊孝訳「カントよりランベルト宛、1765年12月31日、ケーニヒスベルク」『カント全集』21、書簡I所収、岩波書店、2003年、25ページ。
 - 11) Zu Marcus Herz, 1.Mai.1781. *Kant's Briefwechsel*. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd.X, Berlin und Leipzig 1922. S.266-267.

引用・参考文献

- 福谷茂「カントにおける神の問題」『アルケー』(関西哲学会) 第12号、2004年。
 量良治「理性宗教としてのキリスト教」『宗教哲学としてのカント哲学』第七章、勁草書房、1990年。
 Henrich, Dieter: *Der ontologische Gottesbeweis, Sein Problem und seine Geschichte in der Neuzeit* (2, unveränderte Aufl.), J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1967. ヘンリッヒ・本間謙二・須田朗・中村文郎・座小田豊訳『神の存在論的証明—近世におけるその問題と歴史』法政大学出版局、1986年。
 Jaspers, Karl: *Der philosophische Glaube*, R. Piper & Co. Verlag, München 1948. Erstmals in der Fischer Bücherei, Hamburg 1958. (abgek. Glaube). ヤスパース・林田新二監修・中山剛史・平野明彦・深谷潤訳『哲学的信仰』理想社、1998年。

Jaspers, K.: *Einführung in die Philosophie*, Artemis, -Verlag, Zürich 1949. 2. Aufl., 1950. (abgek. Einführung). ヤスパー
ース・草薙正夫訳『哲学入門』新潮文庫、新潮社、1954年。

木坂貴行「カントと神の存在証明」カント研究会編『批判的形而上学とはなにか』現代カント研究2所収、
理想社、1990年。

久保元彦「神の現存在の存在論的証明に対するカントの批判について」『カント研究』所収、創文社、1987
年。

森哲彦「カント純粹理性批判の解明」名古屋市立大学人文社会学部『研究紀要』第17号所収、2004年3月。

森哲彦「カント哲学前批判期の解明」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第7号所収、
2007年6月。

Pölit, Karl Heinrich Ludwig: *Vorlesungen über die philosophische Religionslehre/Immanuel Kant*; Hrsg. von Karl
Heinrich Ludwig Pölit, — Unveränderd. reprograf. Nachdr. d. 2. Aufl., Leipzig 1830. — Darmstadt:
Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982. ペーリツ編・近藤功訳『カントの哲学的宗教論』朝日出版社、
1986年。

Schmucker, Josef: *Die Ontologie des vorkritischen Kants*, Berlin, de Rruyter, 1980.

高橋昭二『カントの弁証論』創文社、1969年。

宇都宮芳明『カントと神 理性信仰・道徳・宗教』岩波書店、1998年。

宇都宮芳明「人類の啓蒙に宗教は必要か」『カントの啓蒙精神』VI、岩波書店、2006年。

山田弘明「カントとデカルト的証明」名古屋大学文学部『研究論集』哲学編52所収、2006年3月。